

## 編集 後記

今これを書いている時点で世間の注目を浴びているのが、STAP細胞論文に関してである。細胞の存在に関しては今後の追試を待つことになるが、画像の加工や文章のコピー&ペーストが行われていた事実は消えない。このことにより研究者の倫理や、「なぜ査読者は見抜けなかったのか」といったことが、研究とは遠いと思われる一般誌でも広く取り上げられる事態となった。

編集委員として読ませていただいた論文の中に、投稿者が教育・研究機関に所属し、当該研究のためにデザインを組んだと思われるものであるにもかかわらず、倫理審査を経ずに実施された投稿がみられることがある。たとえSTAP細胞がなくても人体への害は生じないが、我々の領域は人の健康に直接関わることを扱う場合も多い。そう考えると、研究職がデザインを組んだ研究を実施する場合、研究倫理審査委員会の承認を受けることは、倫理面の保証のための最低限の必要条件と思う。

ただし、今回の例でもわかるように十分条件ではない。もし倫理に反することが行われた場合、それをなかった時点に戻すことはできないが、少なくともそのような論文が公表されることを防止するのは査読者や編集委員会の役割だろう。研究の意義や結果、それが導かれた手順等でなく、データの信憑性や記述自体に目をこらさなければいけないとしたら、寒々しい話である。しかし、それも社会に受け入れられる雑誌であるために必要なことと捉えたい。

こうは書いたが、STAP細胞については、iPS細胞に続き日本人が世界をリードする発見をしたことに心躍った。研究の公表では間違いがあったとしても、存在自体は本当であることを願っている。(鳩野洋子)

### 次号予告 (第61巻・第5号)

#### 公衆衛生活動報告

学校保健と地域保健の連携による思春期発達障害児支援の取り組み思春期精神保健対策の必要性  
 .....全 有耳, 他  
 精神障がい家族ピア教育プログラムの普及  
 「家族による家族学習会」のケーススタディ  
 .....蔭山正子, 他

#### 研究ノート

ラダリング法を用いた就労男性の食物選択動機の  
 解明.....上田由喜子, 他